

「イメージの脈動にふれる」

みんなく公開講演会

国立民族学博物館（みんなく、大阪府吹田市）が毎日新聞社と主催する公開講演会「イメージの脈動にふれる」が3月25日、大阪市北区のオーバルホールで開かれた。会場とインターネットのライブ中継で計約350人が参加。思想家・人類学者の中沢新一さんの基調講演「眼とイマージュ」に続き、みんなくの川瀬慈准教授が「蠟

と金―エチオピアの楽師が奏でる生と死のイメージ世界―」、末森薫助教（現准教授）が「色と光がつくりだす敦煌莫高窟のイメージ世界」の題で報告。人間とイメージとの関係を探り、これからの知や学問、アーカイブのあり方を問い直す討論が行われた。

【山脇新一郎、清水有香、森田真潮、写真・北村隆夫】

内なる視覚 儀式や文様の原型に

「イメージの脈動にふれる」というタイトルそのもののズバリの話をする。イメージというと観念的なもののように感じるが、実は物質的な生命過程とじかに結びついていて、それがイメージの特殊性を作り出しているんだということを明らかにできればと思う。

この問題に近代科学の中で一番早く着目したのは精神分析学を作り上げたオーストリア出身のフロイトという人で、その研究は夢判断から始まった。夢は、睡眠中にイメージとして湧き上がってくる。昼間見ている世界とよく似ているが、しっちゃんめっちゃかたで非合理的な展開をする。この非合理性がどこから来るのかとフロイトは考えた。

近代の啓蒙主義では、人間の心は理性によって動いていると考えられてきた。そこでは、言葉の構造がすべての基準になっていた。ところがフロイトは、それでは人間の心はまったく分からないと考えた。夜になると人間の心の地下界のようなところから何かの力がせり上がってきて、心が理性的に働く構造を次々につくりかえているということを発見した。この、人間の生命過程により近い部分の心の動きを「一次過程」と呼んだ。私たちが言葉を使って、理性的に判断したり理解したりしているのが「二次過程」。その直下には一次過程の大陸があって、言語とよく似てはいるが違う動きをしている。人類学や民族学が対象にしている

思想家・人類学者 中沢新一さん



生命につながる心の動き

人たちは、一次過程を自由自在に操り、言語でなくイメージで生きている。イメージとは何か。そこから真理を引き出すとは。そういうことを扱う学問に大きく変容しなければならぬ。今日の講演会のテーマは非常に重い。

1920年代にドイツの眼科医、リヒャルト・シエラーによる重大な発見が一つあった。人間が青い光を長く見ていると光の粒々が見えてきて、それが数珠のようにつながって移動していく。つまり、私たちの目の中から光が現れる。これが70年代に再発見され、内部視覚と呼ばれた。実験室で被験者の視覚に現れた図形―格子状や渦巻き状といった図形にほぼ対応するような形が、新石器時代のさまざまな遺物に描かれている。旧石器時代の遺跡、仏拉斯コ1の真つ暗な洞窟の奥にも幾何学模様が描かれている。私たちの心にはイメージの貯蔵庫がある。内部視覚の現象によって描かれたものが儀式の大本になり、衣装や家屋の文様の原型にもなっている。

現代の科学では、目と直接つながっているのは脳だとされる。視神経は脳に集まっている。一方、私が見てきたチベット仏教では、もう一つ、心臓に直接つながった目があると考える。座法と呼吸法、眼球固定で、内部視覚現象の光を出すツクチェンという修行があり、誰でもできるようになる。つまり、私たちの視覚は二つの活動が合体してつくり出されている。一次過程に大きく影響を受けながら脳でイメージを合成する作用と、それとは別に生命過程に直結して脈動する内部視覚の作用だ。

私たちは合理的につくられた生き物ではないし、理性によって世界が制御できるものではない。生命に直結した脈動と、脳の中の理性とが上手に結合し、バランスのとれた状態をつくりあげたときに、自由や幸福を感じることができる。これが、仏教が解脱と呼んだ状態だろうと思う。

川瀬慈准教授 言語超えた世界

エチオピア北部の町、ゴンダールを中心に音楽で生計を立てるアズマリという職能集団がいる。王侯貴族のお抱え楽師、道化師、社会批評家、庶民の代弁者、税の徴収係、戦場で兵士を鼓舞する係、イタリアの進攻への抵抗など多様な役割を担い、いにしえから歌を通して空間を異化し、人々の死生観にまつわるイメージを喚起させてきた。



アズマリの歌には「蠟と金」という特殊な世界がある。蠟とは、詞の中で字義通り理解される単語や文節のこと。金は、蠟が徐々に解けて現れ出るイメージの層である。歌詞の大半には人の生死に関わる諦観や無常観が埋め込まれているが、抽象的かつ多義的に解釈することができ、固定的な答えや論理的に首尾一貫したメッセージはな

い。聴き手は自らの想像力を頼りに、深遠なイメージの海に潜り込むことを求められる。金のパートをイメージのアーカイブだと捉えれば、アズマリはその番人兼コンダクター（指揮者）だと言える。

ドイツにある民族学研究の拠点、フロベニウス研究所では、20世紀初頭から半世紀にわたり民族学者と職業画家が手を組み、世界各地で先史時代のロックアート（岩絵）の模写を続けてきた。研究資料の蓄積だけが目的ではない。奥にある古代の知性や精神性と同期し、直観に基づいて、その世界と交流することが狙いだ。蠟と金も、テキストとして翻訳・解釈することが必ずしも正しいわけではない。言語で捕獲できないイメージの世界と交流するとはどういうことか、私自身、考えていきたい。

末森薫助教 千仏図 光自在に

中国西北部・敦煌近郊の人里離れた崖面に、4世紀ごろから約1000年にわたってつくられた洞窟群、莫高窟がある。この洞窟を彩る壁画、千仏図という視覚芸術を通して、先人たちが残したイメージの世界にふれたい。

千仏図は、坐仏を規則的かつ連続的に並べ、模様のように配置した壁画で、その配色は二つの特徴を生み出す。同じ配色の坐仏が斜めに連続する「斜行方向」と、隣り合う2体の頭光・身光の配色関係で成立する「光背配色」だ。前者は光源から発せられた光の直進性、後者は反射や散乱など光の運動性（運動する様子）を示し、仏の放つ光明の二面性を表現していると捉えている。

絵師の協力を得て、千仏図の制作工程や色彩を再現したところ、新たな知



見を得た。たとえば、背景に染料のえんじを重ねると壁面全体の雰囲気が変わり、仕上げ線を入れると仏に生が吹き込まれる。色彩を再現した千仏図に、ろうそくの光を疑似的に照らすと、顔や手は黄みを呈した。当時の絵師は、彩色技法と光の特性を合わせることで、全身が金色であるという仏の特色を表現した

と思われる。距離感によって見え方が変わることも分かった。離れると模様のように見え、近づくと仏の詳細な姿を把握できる。千仏図は視覚変化を体験できる装置ともいえる。

光を自由に扱うことができなかった時代に、これだけ豊かな光のイメージが表現されていたことに驚きを隠せない。現代は光を自在に扱える便利な時代だが、私たちが捉えている世界は限られたものかもしれない。

2/2

パネル討論

川瀬 中沢先生の話には、理性と一次過程の動的な均衡を保ちつつ世界を探索するのは可能かという問いかけがあった。

中沢 最近、僕は「レンマ学」という本で、人間の知性にはロゴスとレンマがあると書いた。ロゴスは事物を時間軸に沿って並べること。レンマは全体をまるごと把握する働きを指し、一次過程の話はレンマに関わる。今この世界はロゴス

中心的で、コンピュータをはじめ何事もロゴス的に動いている。私はレンマ的な知性を土台に据え、世界の構造をどう変えられるかを考えたい。

川瀬 レンマ的な知性は、人間的な世界を復権させる役割があると捉えているのか。

中沢 現代の世界は面白くて、例えば川瀬さんがエチオピアで映像を撮ることができるのはデジタル機材があるから。だけどそれで撮られるイメージは人間の

無意識に深く入り込む力を持っている。つまりロゴス的な道具が引き出す人間の知性はおそろしくレンマ的でもある。これがイメージの矛盾であり、可能性に満ちた興味深い点だと思う。

川瀬 莫高窟はイメージに満ちた映画的な場だが、末森さんが試みる、洞窟内

きたらいいと思う。

川瀬 脈動そのものがイメージを生み出すという中沢先生の話もあった。莫高窟ではそれについてどう踏み込んで議論できるか？

中沢 イメージが中心から周辺へ展開する曼陀羅に対し、莫高窟の壁画は中心

蓄積から新たな意味を

の絵画の再現のねらいは何か？

末森 今回の制作では当時の彩色を再現したが、色だけでは空間の全体像が見えてこないだろうと考えている。入り口から差し込む太陽や揺らぎのあるところなど当時の光をどう再現するかが今後の課題。その先に思想的な世界も再現で

も周辺もなく、四方八方十方へ同じ強度で広がる。まさに脈動だ。偏りがなければ本来の心のあり方であり、より根源的かもしれない。

末森 唐の時代、配色の組み合わせが減るシンプルな千仏図が登場し、それこそ四方八方に仏が充滿しているような世

界が描かれる。時代や洞窟の構想によって表現したい世界が変わり、千仏図もそれに合わせて描かれ方が変わっていたのだろう。

川瀬 中心がなく、さまざまな要素が絡み合う関係ということでは、最近の人文書も「縁起的」ともいえるような思考に向かう傾向がある。

中沢 新しい発見よりも今までの蓄積からどう意味を取りだすかに学問の関心は変わってきている。そのためには情報量を一度にたくさん集められる記録装置が必要で、だから映像が影響力を持ち始めているのではないか。人類学の主体はイメージになると川瀬さんは言い続けているが、その通りだと思う。

川瀬 映像の創造的な活用に関して、異なる脈絡の作品や資料をあえて並べることで、新たな意味や視点を導き出し議論する試みが、学術とアートの交点にお

いて盛んに展開している。一方でアーカイブそのものも思考し、我々に問いかけてくるという議論は可能か？

中沢 膨大な情報を集積したアーカイブ自体にどう語らせるか。解釈学がこれから必要になる。例えば聖書はイエスを中心にしてつくられたアーカイブで、再解釈からカトリックやプロテスタントなどが出てきた。解釈からいろんなものが出現するのがアーカイブの面白さだ。

末森 映像は記録装置という話があったが、ある種の記録装置である博物館に中沢先生が期待することは？

中沢 日本の博物館は官僚的だからもっと自由にしないと。博物館は個人の趣味だが、僕が好きになるのは例えば仏ルアン近郊の農業博物館のような、自由な風が吹き抜けていく感じがある博物館らしくない博物館だ。そんなふうになることをみんなにも期待したい。